〔曲 名〕Notte Serena

静かな夜

〔曲 種〕Serenata

セレナータ

〔作曲者〕Giuseppe Manente

ジュセッペ マネンテ

〔編 曲〕Jiro Nakano

中野二郎

３曲（Notte serena 「静かな夜」、Sogno Lontano「過ぎし日の夢」、Serenata「セレナータ」）とも在伊の元同志社大学マンドリンクラブ指揮者・石村隆行君が
彼地で入手したものであることをお断りしておきます。

原曲の形はマンドリンとピアノに書かれたセレナータで、作者が第60連隊吹奏楽団指揮者時代のもので、ミラノのランツィーニから出版されました。
この作者のマンドリン曲として、日本でよく知られている”マンドリン芸術”は、今世紀に入ってからのもので、”メリアの平原”その他の著名な曲は、
さらにずっと後になりますから、この原曲が1899年（19世紀）に既に出版を見たのは珍しく、マネンテはこの頃からマンドリンへの関心を深めて行ったものゝようです。
少しＰＲめいて本意ではありませんが、私が特別にこの作者の作品に惹（ひ）かれて、過去に多くの編曲をした経緯を書いておきます。
1938年（昭和13年）日本も第二次世界大戦に巻き込まれつゝある時、日独伊防共協定が結ばれ、
その煽（あお）りで私のギター曲がミラノの”イル・プレットロ”から出版され、俄（にわか）に脚光を浴びたことがありました。
その頃からマネンテ氏との文通が始まり、沢山の出版作品、自筆作品を贈られたのがきっかけだったのですが、それは殆どマンドリン関係の曲ばかりでした。

然し彼の職掌柄、主要作品が吹奏楽に在ることは判っていたので、百方手を尽くして探り始めたのです。
大将15年11月20日、東京のオルケストラ”エトワール”の第10回演奏会にマネンテの”マンドリン芸術”が、日本で初演され、
この曲の解説と作者の経歴が詳しく紹介されているのです。
後にその出典が”イル・プレットロ”誌であったことが判り、この曲目解説者が当時”エトワール”の指揮者・田中喜助氏で、既にこれを読んでいた人があったわけです。
その中に「今と昔」「華燭の祭典」等が列挙されていたのです。
まだ見ぬ作品にどれだけの憧れと期待を持ったことでしょう。
後に編曲した時も邦訳曲名もその侭（まま）にしたのですが、”今と昔”は”Antico e Moderno”ですから、”昔と今”とすべきでしょうか。
”華燭の祭典”も”結婚の祭典”（Festa di Nazze)では戴けません。（閑話休題）
戦争の激化に双方消息不明の侭（まま）、文通も絶えてしまったのですが、終戦後随分経ってから、マネンテが1941年（昭和16年）に亡くなっていたことを知ったのです。
文通が絶えてから数年後のことでした。
なお、その後久しく経って、これも同志社大学出身で指揮者でもあった岡村光玉君が渡伊、フィレンツェで勉学中にマネンテの息子、ウーゴ。マネンテを訪ね、
父ジュゼッペのことを種々聞き糾しましたので、書き留めておきます。
あの不明の侭（まま）、放置されていた”メリアの平原”のことも、それで初めて真相が判明したのです。
半世紀以上も不明の侭、日本で盛んに演奏されていたのですから、日本のマンドリン界もいゝ加減なものです。
父マネンテのエピソードとして、ある上官が常々言っていたことは”・・・・・・マエストロには優れた三つのMをもっている。
一つはMusicaのM、今一つはMacaroniのM、そしてあと一つはMoglie（夫人）のMだ。・・・・・・と言っていたそうです。
マカロニは大変な大食漢であったということです。
MoglieのMのIda夫人は仲々の気丈な人で、ある時マネンテが乞われてヴェルディの”イル・トロバトーレ（歌劇）を指揮した時のこと、

マネンテはそのプリマドンナと少々怪しくなり、それが夫人の耳に入るや否や”私をとるか、彼女をとるか！”と一喝。
以後マネンテはいくら乞われても唯の一度もオペラを振らなかったとのことです。
イタリアにあって指揮者がオペラを振らないことは非常に稀なことだということです。
1921年にエジプトの宮廷楽団指揮者として招聘された時、既に定年退官していたのですが、
Ida夫人がエジプトに大変興味を持たれていたので、赴任を決心したとのことです。
例の”カイロの思い出”などはこの時の所産でした。

1992年 12月 発行

マンドリン合奏曲集１集（JMU版 パート譜付）より